

特集 中国の政動(第4期) 全国人民代表大会の評価

# 討議 中国の新体制は何を意味するか

中国の新憲法と新体制の本質は どう理解したらいいのだろうか。はたして周恩来体制の確立とみていいのだろうか。いぜん謎に包まれた中国の政局内部に 専門家3氏は鋭い分析を加えていく。

総合研究所中国部長

桑原壽二

東京外国語大学助教授

中島嶺雄

東京工業大学教授

矢島鈞次

発言順

## ひとつの‘セレモニー’

桑原 いまの報告 名論卓説でして……。矢島さんいわれたように日本での一般的な評価は 実務官僚派の勝利 文革派の敗北という図式で取り上げられているから まず 全人代の評価をめぐる 話を展開させていただきます。

全国人民代表大会のきわだつた特徴は 文革路線を国家がやらなくちゃいけないということになったことです。したがって 最高権力機関である全国人民代表大会の本来あるべき機能が著しく喪失して 端的にいえば党の地位を保障する機関になり下がったといえる。

文化革命を全面的に肯定し ある意味では文化革命の集大成化されたのが新憲法である。そして そのような憲法から出てきた人事というのは ややもすれば文革路線から逸脱する可能性の多い人事になっておる。ここに 憲法精神あるいは憲法原理と そこに出現した人事とのあいだに非常に大きな乖離 矛盾がきわだつて感じられる。もし実務派が勝ったとするならば はたして今後脱文革化的な方向にいくことを許されるのかどうか そこで十分に憲法規定によって締めつけ 監視がなされている。これが憲法を読んで第一に感じたことです。

その次に どのような流れを背景として人民代表大会がもたれたのか。とくに重要なのは 人民代表大会のすべての発表物を終わった後に 人民日報の編集重点がどこにおかれているのか。こういう3つのなかで取り上げて はじめて真相がわかると思います。

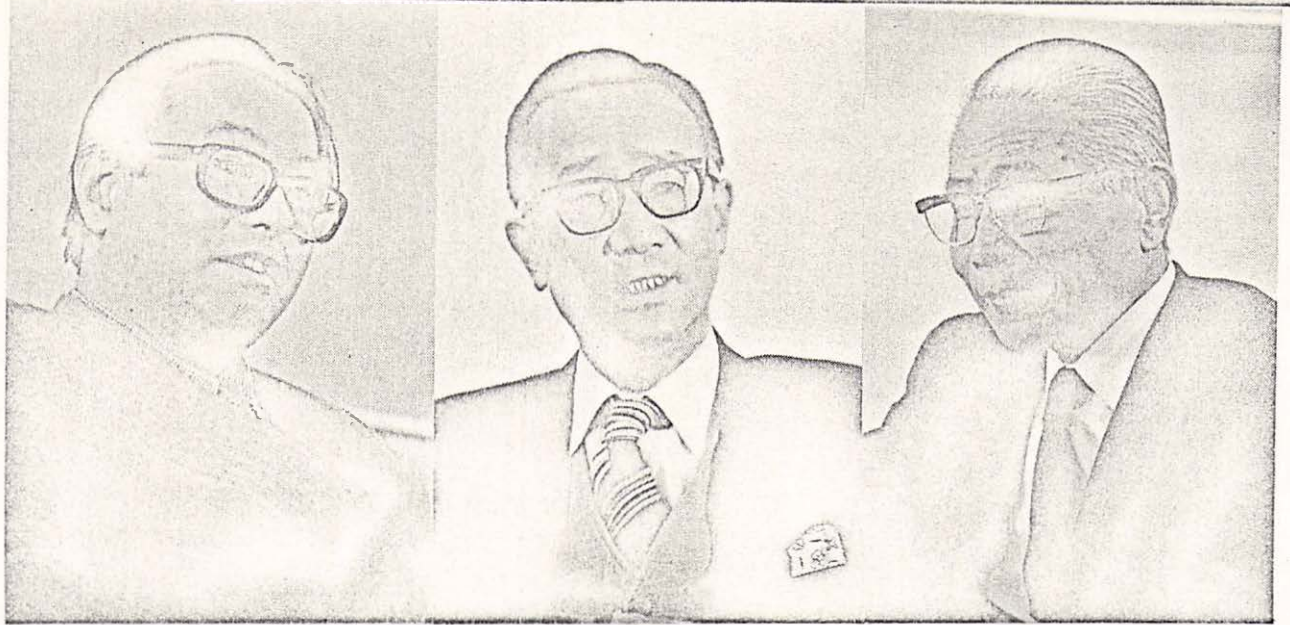
人民代表大会までのプロセスですが ある意味では批林批孔運動が挫折した。それは いろいろな角度からわかる

と思うが その批林批孔運動の挫折は いったい何を意味するかというと 文革派の発言力と prestige の低落を意味する。それと裏腹に 資源開発において相対的な成果をおさめた。成果をおさめたゆえには 毛沢東革命思想に徹したからおさめることができたんだというふうにつないでいますが なんといいても そこで実務派の発言力が相対的に伸びた。そのような背景において裏腹な 矛盾した形になってあらわれた。こうみるわけです。

その場合に これは10月に出た第26号文献ですが そこで毛沢東は 文化革命をすでに8年やった すでに安定化を求めているときである。だから 全軍は団結しようじゃないか それで人民代表大会は 間近に開かれる こういうことを述べている。ここが非常に微妙だ。“すでに安定すべき時期にきた”この“すでに”をどういうふうに解釈するか。批林批孔運動は成果をおさめていちおう勝ったあるいはここで混乱期を切り抜けてきたからこの場合団結するのか。あるいは先ほど矢島さんがいわれたように 国内の経済の混乱 あるいはいろいろな派閥対立 そういったことから この場合はひと息入れるときではないかという意味を“すでに”は含んでいるのか。

結局今回の人民代表大会は 10年の混乱を切り抜けてこぎつけたというプロセスとしてのひとつのセレモニーでなかったか こういうふうにあります。

それに対して 十全以後の論調操作ですが 毛沢東革命路線を絶対的に守らなければいけない。たとえば 自留地などというのも 必要な弾力性であるというふうに決めている。そのつぎは 今回の全国人民代表大会の最大なる意義は 従来精神を憲法によって法律化したことにおいて



中島嶺雄氏

矢島鈞次氏

原島昌二氏

最も意味があるんだ。文革路線はあくまでもこれを堅持するんだ。もし文革路線にそれのようなことがあったら、承知はしないという論調操作を圧倒的にやっておる。それがもしも日本で考えている。これから中国は経済建設を中心とした総経路線になるとしたら、ここから再び文革以後の論争、いわゆる路線か政策かをめぐっての論争が台頭する。すでに人民日報の論調操作によってそれが台頭しているというふうに私には思えるのです。

### もはや引き返せない

中島 私には実はちょうど全人代のころに中国にいて、帰ってきたばかりですが、その印象が強いものですから、そんな印象を含めてお話ししたい。

ご指摘のように、今回の全人代は中国の政治史にとって非常に重要な旋回点になると思うんですが、同時に問題があとに残ってしまった大会だったという感じです。形の上では、今回の全人代を通し憲法を通して、党の一元活動というのが徹底的に貫かれることになった。とくに林彪異変の教訓を学びまして、軍に対する党の支配という問題は意識的にこの問題を人事面でも考え、それを制度面でも考えていた。そういう意味で、たぐいまれなる一党独裁体制ができた。

いま、お2人の先生ご指摘になったように、全国人民代表大会は、すでに中国の最高権力機関ではなくて、党の政治統治のなかの一権力機関になった。したがって、中央人民政府としての國務院も、党のそういう指導下における行政機関になった。この点がひとつです。

一方、今度の新しい国家の体制をみますと、私はそこに

は実務派官僚というものの台頭がみられるのではないかと、いう気がする。意外に実務派官僚の壁が厚い。これはまさに一元化といいながら、ひとつの大きな矛盾だと思います。この矛盾を中国がどう処理していくか、われわれがどうみるかというところに、いちばん大きなポイントがあるのではないかと。

しかも憲法の問題ですが、私はどうも日本で憲法を重視しすぎるのではないかと。これまで中国は、一度として憲法というものをそれほど重視してきたことはない。一種の政治的マニフェストとして受けとめるべきであって、その限りでは矢島先生のおっしゃった点に賛成です。ですから必ずしも憲法を改正せずとも、これを形骸化することはできる。しかも形の上では党の一元化指導体制が貫かれたということは、その最高指導者である党主席、すなわち毛沢東がすべてにおいて統帥権を握る。そうしますとやがて毛沢東死後、だれが統帥権を握る党主席になるかという、たいへんな不安と問題を残していると思います。中国においては、この問題はなお解決できなかったし、一方ジェロントクラシー、高齢者、老人支配体制についても、今回問題は決着できなかったとみています。

私はそういう状況のなかで、どうも文革派の勝利、あるいは実務派の勝利というふうに断定することはできにくいような気がする。というのは、一方で批林批孔運動以来叫ばれておる反潮流、つまり流れにさからうことこそがマルクス・レーニン主義の原則である。敢然と潮流にさからわなければいけないという十全大会以来、あれほど鼓吹された、とくに王洪文報告にあった「反潮流」ということばは、今回、新聞広報にも、周恩来の政治活動報告にも、そして



張春橋の憲法改正報告にも一言も出ていない。これは非常に大きなポイントではないか。ここに十全体制と今回の体制との大きな違いがあって、この点ではまさに批林批孔運動が挫折した。批林批孔運動というのは、とりもなおさず反潮流運動であったはずで、その運動の挫折のあとに出てきた体制だと、みざるを得ないような気がします。

中国に行って実際に感ずるのですが、実は人民日報や紅旗で感ずる批林批孔運動というものと、1週間のわずかの滞在ですが感ずった批林批孔運動とは、ものすごくギャップがありました。前に私が訪問したときは、ちょうど文革の激動期でしたが、そういう形で批林批孔運動が大衆的な政治運動になっているという色彩はまったくない。学習風景にも一度も出会うことはなかった。そのかわり、最近の理論は、ある意味でスコラ哲学的、瑣末主義的になり、たくさんパンフレットが出ている。それは、どうも大衆運動としての批林批孔運動ではなくて、ある意味で幹部に限定された一種のイデオロギー・キャンペーンになりつつある。つまり批林批孔運動は、当初、周恩来批判が含意され、同時に毛沢東側近体制批判が混在してきたが、昨年秋あたりから変質してきた。しかし、ああいう運動自体は残しておくことが必要なので、最近では幹部なり知識人中心のイデオロギー・キャンペーンになってきている。

一方、私は8年ぶりの変化に非常に驚いた。ともかく雰囲気として、生活に即した、ある意味で正常化された。政治権力の社会とわれわれの住む社会とは全く違うのだという断絶がある。一般に感じるのは、現代の中国が欲しているのは、少しでも豊かになり正常化する期待であり、そういう潮流は非常に大きいということです。

結局、この潮流にさからえなかったと思う。この潮流はある意味では時代の流れであって、中国においては、私はポイント・オブ・ノー・リターンだと思います。そうしますと、文革派なり、イデオログ、そして毛沢東思想のインドクトリネーションが、今後ますます進むとしても、そういう大きな潮流にはさからえないのではないか。まさにこの潮流が今回の全人代体制を生み出したのではないかという気がします。

## 毛主席の欠席

矢島 私自身も両先生のいわれたとおりだと思う。ひとつの重要な問題は、形式的であるか実質的であるか別問題として、共産党の中央委員会の主席が毛沢東、軍事委員会の

主席が毛沢東、そして党を中心にして国家の上に党をおいて、軍政のすべてをつねに一元化していく。こういうことだと思います。

2つめの問題は、やはり両先生のご指摘になったように、批林批孔運動の挫折の問題があると思うのですが、ただ問題は、文革派と実務派とのあいだにおいて、中国の経済的ないしは時代的いろいろな変化に適応するための妥協が成立したのだ。ですから、いま中島さんがいわれたように、タテ座標（党）に対するヨコ座標（官僚）も依然として厚い壁だと思います。時代の要請にそわざるをえない。つまり、文革派路線では経済の発展も望めないようなことが非常に重要な問題である。

そして農業から軽工業、重化学工業へという路線の設定まで、今度はしたのですね。そういうものにこたえていくためにも、憲法は形骸化していますが、そういうようなことで、文革派と実務派との妥協。ですから批林批孔の問題について、批孔については妥協した。批林の問題はいわゆる軍部との妥協がはたしてできたのだろうかという問題が、あとにひとつ残るのではないだろうか。

中島 「ニューズウィーク」の問題を日本でもぜひぶん取り上げていますね。香港では昨年の暮れあたりからこんなニュースが流れていましてね。そこでちょっと質問なのですが、これが「憲法草案」であるとか、「五七一工程紀要」であるとか、それから23号あるいは26号文献みたいに、かなり確定的な文書によって裏付けられたものであれば、やはり大きな問題だろうと思うのですが、先ほど秘密文書ははたして文書で確認されたものかどうか、そのへんちょっと疑問なのです。

矢島 これ私もわからないんです。何ら確認する手がかりを持っていない。だが、昨年来、香港の新聞あたりでは、さかんに毛沢東は中南海の私邸にはいないんだということを……。

中島 そうですね。現在、北京にいないことは事実です。

ただ今回、これもまた実感になるのですが、毛沢東が全人代を欠席した。これもそんなに大した意味はない。これで毛沢東の権威が失われたとは思わない。だいたいまま、全人代は第3期もそうですし、その前もそうですけれども、毛沢東は何ら主要な報告も演説もしていませんし、名簿の中には北京市代表として出ている、党中央代表として出ているのにすぎない。

私の感じではやはり毛沢東の老齢化は、テレビで見た感

じでも争えないですね。毛沢東の老齢化に伴う実務的な行政能力の低下は明らかなのですが、そのことが即ち毛沢東のカリスマ的権威の後退につながるかという点、北京で感ずるかぎりまったくそうじゃないですね。今回の全人代でもむしろ毛沢東のいないところで毛沢東以後へのいくつかの不安や危機感、深刻な認識の中で、当面の団結を誓い合っただと思える状況があります。

矢島 私は非常に意図的に欠席したと判断をします。

### 文革アレルギー

桑原 私は毛沢東の欠席よりも、全人代が何がゆえに秘密会議をしたのか、そのほうが重要ではないかと思う。もうひとつ、いままでのお話を聞いていて、いま全中国は文革アレルギー-症状を起していることは確かですね。日本の原爆アレルギーのようにね。

たとえば批林批孔運動が展開するときに、高等学校に取材した『人民日報』の記者が“また批林整風運動が始まっている”そして、大学入学のいままでの学術試験中心からまた推薦制になったということを知りがっかりしている。そしてまたスプートニクが上がったのかということを知ら

は言っている”という記事を書いている。スプートニクというのは、人民公社のいちばん初めの名称が衛星公社で、大躍進政策というものにもうこりごりだ。一種のアレルギー-症状を起している。

それはひとつは中島さんのいわれた社会の大潮流です。それがために批林批孔運動が逐次修正され、あるいは換骨奪胎されていったいちばん大きな社会的な背景ではないかと思う。先ほど“反潮流”という言葉がぜんぜん出なくなったといわれたが、批林整風から批林批孔に切り換えて、あの好きな“整風”という文字がぜんぜん消え去った。こういったことはやはり批林批孔の挫折を意味する。その挫折せしめたいいちばん大きな原因は、社会のとうとうたる潮流である。これは肯定しなければならない。

しかしはたして、中島さんがいわれたように、もうそれは取り返しのつかない問題なのかどうか。それに対する大きな抵抗が、今度の憲法であったと思う。

つぎに、しからばそれによって、毛沢東の死後に描いていた青写真を断念したのかどうか。これは問題をつかまえる大きなポイントではないかと思えます。

第1に、憲法規定からいって、国家主席をおかなくなっ

私は日本の  
企業の進出を心から  
歓迎します。

ハンブルク経済運輸大臣ヘルムート・ケルン



われわれも



われわれも  
歓迎します。



●ハンブルクは、ドイツ最大の貿易港。拡大E・C圏のほぼ中央に位置する。恵まれた立地条件にあります。港湾面積は100km<sup>2</sup>。そのうち15km<sup>2</sup>は自由貿易地帯です。なお市内には53km<sup>2</sup>の格安な産業用地を確保。さらに新しい用地も次々に計画中です。もちろん陸と空の交通網も、ここを基点に四通八達。ヨーロッパ進出をはかるなら、ハンブルクをご検討ください。

●ハンブルクは、自由ハンザ都市の伝統を誇る街。そのせいか、未経験だからといって、既存企業にボイコットされるといった懸念は、まったく無用。すでにたくさんの日本企業が活動中です。すぐれた製品と企業の進出を望んでいる。消費人口1350万のエルベ下流地域が、目前に広がっています。北欧、東欧も背後に控えています。旺盛な購買力が期待できる市場です。あなたの企業も、ハンブルクを目指してください。

●ドイツ人は、自分の仕事に完璧さを期すことを、なによりも大事にします。なかでも、ここハンブルクの人々は、その熱練度の高さと作業の勤勉ぶり、ヨーロッパでも指折りの労働力と、各方面から高く評価されています。ヨーロッパで、質の良い労働力をお考えなら、やはりハンブルクといえるでしょう。伝統ある自由ハンザ都市と100万の労働人口をもって、ハンブルクは企業進出を歓迎します。

企業を暖かく迎える伝統 — 自由ハンザ都市

**Hamburg** 出

●お問い合わせ先：東京千代田区有明3丁目8番1号 虎の門三井ビル 100 TEL:503-5031 自由ハンザ都市ハンブルク 駐日代表事務所



た。これは要するに 独裁実権の分裂化を意図したものである。これは毛沢東なきのちの党主席が同時に国家主席を第2番目に軍を党主席が統率する これは後継者を決めるポイントになると思うのですが その場合は 同時にこの党主席が軍権をも握るという非常に大きな保証条件を後継者に与えている。

第3番目には これは毛沢東の提案によって規定に入れたと断っておりますが 要するにストライキ権を与える。これは もし文革路線からはずれるとストライキ権を発動する。要するに造反有理ですね。もうひとつは選挙制度のパターンづけです。これは協商 話し合い。その協商過程ですべて党の有利なような ひとつの党の指導権を握っている派に有利になるように徹底的に選挙制度パターンが形成される。

第4番目に 全国人民代表大会代議員の社会構成ですが 圧倒的多数はやはり労農兵代表と どちらかというと文革左派の基盤に有利なようなひとつの代表選出 これはこれからのひとつの政治体のパターンの縮図ではないか。これは重要視しなければいけない。

こういうふうには二重 三重に今回の人民代表大会は 毛沢東なきのちを暗黙の課題にしている それにこたえるように 憲法によってこういうふうな規定づけを行っている。毛沢東の描いている自己の死後の世界に対する青写真は 執拗にここで追求されていると私は見るのです。

では その青写真とはいったい何なのか ということが問題になってくるのです。これは いろんな論文から割り出すのにそう苦労はしないと。思う。

矢島 党によって一元化され 専制政治的体制が出来上がった憲法が 本当に実施されるかどうか別問題として いままでの憲法ではチェックがはっていましたね。ところが 今度チェック要因が全部抜けているということになりますと 文字どおりの専制政治ですね。そういう体制が少なくとも憲法を読むかぎりにおいては確立したというように 私は判断するのです。

桑原 要するに憲法といっても 向こうではアクセサリーだと言えればそれっきりですが。

### ‘脱イデオロギー・脱政治’

中島 毛沢東自身が 根本的対応だといっているのですから そういうものなのですが。いままでの議論の中で私のほうからちょっと質問なのですが ご指摘のように 毛沢

東精神というものはまさに憲法の中にはいっている。まさにそのとおりなのですが だとすれば なぜ今回 批林批孔運動の挫折があり そして国务院人事を見るかぎり いろいろの見方があり 張春橋を文革派と見ていいかどうか 私ちょっと疑問なんですけど むしろそういう実務能力のあるものが なぜ出てこなければいけなかったのか。そして なぜ反潮流という言葉が消えたのか そして 反潮流とともに唱えられていた反復権ということが あれほど鼓吹されたにもかかわらず……先ほどご指摘があったように今回軍の中に復権派が非常に多いのか。それから国务院の副総理クラス……。

矢島 副参謀長なんかみんなそうですね。

中島 文革派のときに批判された連中が非常に多い。ですから こういうことを見ますと やはりその疑問がどうもまだとけない。もしも それほど文革派といわれるものが 根強いならば こうまでならなかったんじゃないか。ですから どうも私はポイント・オブ・ノーリターンと申し上げたんですが それに対してそういう抵抗がつねにこれからまだいろいろあると思うのです。抵抗はあるけれども 結局その流れに逆らえなかったのじゃないか。

中国での実感を考えますと 先ほどいったいわば民衆の中における脱イデオロギー 脱政治 これははっきりしている。政治第一なんて雰囲気はまったくない。国务院も暇があればトランプやっていますし ぜんぜん学習してませんね。それと一方 人民大会や中南海を中心にしてものすごい政治権力の世界がある。こういう断絶ですね。この断絶がまさに今回の 先ほど言いました党の一元化 実務派官僚が どうしても出てこざるをえないということの反映として現れていると思う。しかも 特派員の人たちは教えてくれないのですけれども いまの北京では そういう脱イデオロギー的な社会の雰囲気と同時に 政治の権力の中核で何が起っているかわからない。

先ほど秘密にしたのはなぜかといいますが 私は意外にわかるような気がします。林彪事件が起こったのは数年前ですから 代表だって明らかに地下道を通って行く以外にない。私も現場にいまして これ もう地下道以外にないということを確認したんです。地下道はものすごく整備されている。しかもいまの中国は たとえば北海公園は完全に立ち入り禁止です。故宮の裏の景山公園 あそこは景色がとてよく 私 前に行ったときは文革でだめだったので 今回はあそこから見てやろうと思いましたが 全部立

ち入り禁止です。北海の湖にかかる橋なんかも鉄柵がありまして 番兵が30メートルおきぐらいに立っていて 1メートル以内に柵に近寄ることができない。なぜかというまさに中南海に近いですからね 景山に登れば全部見えるから。北海の橋から湖を伝わって中南海にいけます。そういう社会が存在しているので そのへんがどうも最近の日本の報道などによって ぜんぜん伝えられないが故に 謎が非常に拡大される。これはいまの中国にとっては まさに当然のことが当然に起こっていることというふうな気がいたします。

### 歴史は繰り返すか

矢島 中国が成立してから25年の歴史を見ていると つまり必要が起こったときに必要なようになり またそれから締めつけがあり それからまた それが経済的減産とか造反とか 社会的大衆の中にいろんな問題が起こってくると そいつを緩める。締めたり緩めたりの今度も ひとつの段階だと思う。

ですから 1969年4月の九全大会以後 文革からの立ち直りのために緩めて 穏健派路線にして 天然災害などもありましたけれども 比較的 開かれた世界をもっていた。そして今度73年の十全大会のあと 今度文革派が締めつけをやった。その結果が経済的にもだめだった 思想上もだめだったということになり 批林批孔の挫折があつて もういちど経済は必要だということになった。今年の元旦 社説や新憲法にもあるように 国防 科学 基礎産業 こういうところで 経済面の緩めをやっていく。

じゃ このまま実務派路線で続くかということ いずれまた文革的締めつけの時期はくるのじゃないかと思う。そういう歴史のくり返しなんですね。今度の全人代も それのパターンのひとつと考える。しかも その中で一貫して流れているのは 毛沢東路線優位。

中島 くり返しという点では ちょっと感じが違うのです。これまでたしかに譲歩と急進の往復循環です。しかし それにしては文革はあまりにも大きな後遺症を残してしまった。同時に それが林彪事件・批林批孔につながってきて……中国の潮流の側からすれば ‘もう再び……’ という気持は強いんじゃないか。

ですから往復循環の衝動はあるけれど 毛沢東以後の中国は 以後への不安が大きい故に 一種の暗黙の凝集力 これが今回の体制を生み その凝集力が同時に国内面だけ

でなくて 対外的な面 これから中国にいるんなものがは いてきます その外圧にいか耐えるか いまの中国社会と外の世界とはまったく違う世界だから そういう世界を今後 受容していかなければいけないという やはり大きな危機感がこういう体制を生み出したのではないかという気がする。

### 後継者は張春橋

桑原 そうですね。その意味じゃ肯定するのですが 要するに現在の体制は 批林批孔の挫折はひとつの社会的な流れですね。それを背景にして生み出されたものである。それに対して留保条件をなしているのは 憲法の本質でしょう。つまり憲法は文革派路線 そこに出てきた人事は 脱文革化しやすい。この乖離がいったい今後どのような作用をなすか。

ただここで私たち考えなければいけないのは 文革派というものの存在です。これがたして巻き返し またもうひとつの潮流をつくりだしていただく力があるのか その問題を検討しなければいけない。たとえば 張春橋がたして文革派かどうか と同時に鄧小平が実権派かどうか という疑問が出てくる。非常にこんがらがっている。したがって 文革派のよい点と弱点を検討しなければならない。その弱点は江青というあの女が中心になっているということ これがもう致命的な欠陥だと思う。

第2番目は この時代の潮流にうまく即応しうるキャリアがないこと。これがもうひとつの欠陥です。ただひとつ文革派の優れた点は やはり毛沢東思想およびその路線の正統継承者になっている。この点は 中国にとってはやはり大きいと思う。

中島 その場合 たとえば張春橋を穏健派と表現しましたが やはり文革派に入りたいのは 上海における共同作業をやった文革派の団結 そのよし悪しは別にして その団結は考えておかなければいけない。

桑原 裏でイニシアチブを握っているのは 張春橋だと思います。そのひとつのキメテは 文革派に所属しながら そうとうな政治家であることもさることながら 毛沢東の創始した人民公社制度 張春橋が創始した革命委員会が 毛沢東と肩を並べて憲法規定にのせられるということ。これは張春橋が中国共産党の歴史に 不朽の足跡をひとつ残した意味をもつ。これは大きな存在になっている。

同時に 憲法改正報告を行い あるいは軍の中に総政治



部をおいたことから 陰のイニシアチブは張春橋が握っているような気がする。もちろん一般的に言われるように 鄧小平は首相の後任になるかもしれない。しかし 党主席の後任には いったい誰になるんだという ワン・ステップにおいてかもしれませんけれども やはり張春橋にかけたいような感じがします。

中島 張春橋はたしかに文革派だと思いますし 上海の活動家としてもそうですし そもそも十全大会で 張春橋がいわば大会秘書長という役割を果たして 王洪文に譲ったのは 張春橋がいわばあの中でいちばん実力者であるが故に 十全大会という時点では 張春橋を表に出すことの軌轍を考えたんだろうと思う。私もその時分から 王洪文はアテ馬であるというふうに考えていました。それから王洪文の十全大会の党規約報告と 今回の憲法改正報告とくらべてみますと やはり張春橋のほうが着実ですね。ただ 彼が文革派として存在したのはまさに造反の時代それから奪権の時代です。そういう彼が いわば権力の中核にのし上がってくると そういう野党時代のビヘイビアだけではすまされなくなる。そのことが今日の張春橋をあのようなものにあらしめているというような気がするのです。

かつて鄧小平がそうでしたね。おそらくいま 鄧小平のかつての総書記的な役割を張春橋が握っている。そうすると 張春橋はそのへんかなり幅広い行動性によって 当面は両者のあいだの調整をし 必ずしも文革派 あるいは実務派というレッテルは必要でないような人物にクローズアップされてくる。桑原先生のおっしゃったようにポスト・マオのあとを占める可能性も出てくると思うのですが……。

桑原 つぎのつぎですね 日本のはやり言葉でいえば。

## 文革派と官僚・実務派

矢島 ただ いま中島さんからのご発言のように 政治をするひとつの宮廷的な場と 大衆との場が乖離すればするほど 文革派に有利になってくる。これ相撲じゃございませんで どちらが勝った 勝たないの問題よりも 大衆が遊離してきまして あるひとつの限られた特定の場で 権力の移動が行われるということになりますと むしろそこではある正当性をもつ。実務的な派閥を周恩来派といいますが 派なんてのはないですわね。しかし あんがい大衆の中に老・中・青というオルグを文革派はいっぱいもっているのですよ。そういうようなものが大衆を誘導してい

くような方向へもっていく。乖離すればするほど そういう意味において文革派的なものが 将来 力をもってくる計算を 毛沢東は十分に立てているのではないかと。

中島 いまのご指摘 おそらくそうかもしれませんが どうも私は 逆にやはりそういうふうな乖離が進めば進むほど どうしても官僚 実務をもっているものの力は非常に強くなる。現在の中国は文革によって官僚体制の国でないなんてのは まったく大まちがいでして ひとつのことを運ぶにしたって 全部官僚ですわね。事態が平穏化すればするほど 官僚層の厚い壁が出てくる。

矢島 だから脱イデオログであることにおいては 文革派もある意味において 脱イデオログだと思うんですよ。ただ問題は もう脱イデオログの問題ではなくして どちらがポスト・マオにおいて実権を握るかという 一種の派閥の次元にもうなってきたと思うのです。

だから 大衆とは無関係にこの問題は処理できるので イデオログの問題で大衆をコントロールするという段階は過ぎたから 脱文革だと思うのです。だから文革派という名前そのものが はたして彼らにとってはありがた迷惑じゃないだろうかというようにも感じます。

桑原 人民代表大会で 日本のジャーナリズムの用語を使えば 周恩来体制は定着化したというふうな捉え方が比較的多いのですが これと継続革命の論理とがぜんぜん違って来るわけでした もし定着化論をいうなら 継続革命論はその政権の定着化の否定の論理になるので ここでも非常に大きな矛盾があります。

そのつぎに具体的な問題でいちばん疑問を感じるのは 人民代表大会を終わったのちの論争操作でいちばん出てくるのは 新政治物をどのように評価するのか 文化革命に生まれた新政治物をどのように評価するのか。これは人民代表大会で要望されたように あくまで育て発展させなければならない ということがしきりに言われる。いまの社会的な大きなひとつの流れにマッチするように 新政治物を育てることがうまくできるかどうかは 大きな問題である。

したがって 総括的に言えますことは 今回の人民代表大会は ひとつのプロセスである。やはり 波乱含みの状態を残したままのひとつのセレモニー的なものが多かったのじゃないか こういうふうに考えます。問題を将来に残したと思います。

